

今月のエキゾチック症例(第12回 2024年6月)

良性？悪性？－フェレットの皮膚肥満細胞腫－

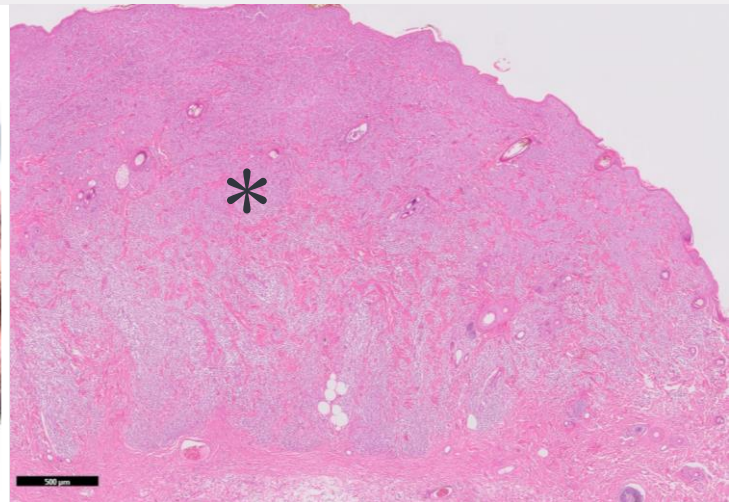


図 1. 肉眼写真。軽度に隆起する紅斑性の丸い皮膚結節が認められます(矢印)。(写真提供:ヴァンケット動物病院 三宿動物医療センター 松原且季先生)

図 2. 組織写真、低倍像。真皮～皮下組織浅層にかけて境界不明瞭な腫瘍性病変(*)が形成されています(図上が皮膚側、図下が皮下側)。

皮膚肥満細胞腫はフェレットの皮膚腫瘍で脂腺腫瘍に次いで2番目に多いです。3歳と比較的若い年齢での発生もあります(平均4.5歳)。孤発性のことがほとんどですが、稀に多発することもあります。小型の平らな局面状～丸い結節状に認められ、色素沈着や痂皮付着、紅斑を伴ったり(図1)、搔痒により自傷していることもあります。

組織学的には猫の肥満細胞腫に類似し、被包されず、均一な類円形の腫瘍性肥満細胞が密なシート状に増殖し、膠原線維により区画されます(図2)。微細で淡い異染性を示す細胞質内顆粒を有します(図3)。異染性顆粒(青い染色液で赤紫に染色)は見えづらいので、細胞診でも染色法に注意が必要です。有糸分裂数は通常少ないです。散在性の好酸球浸潤を伴うこともあります。

大抵は良性の挙動を取り、外科的切除で治癒します。多発性病変、核や細胞質の大小不同、頻繁な有糸分裂像、KIT染色性、浸潤性増殖、脈管侵襲、不完全切除といった犬猫における予後因子は、フェレットでも予後と関連するかは不明です。

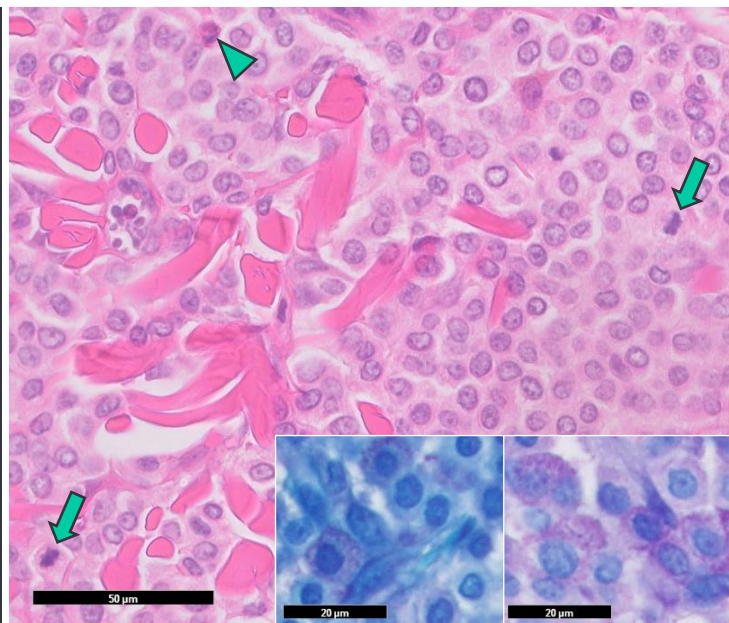


図 3. 組織写真、高倍像。シート状に増殖する腫瘍性肥満細胞は両染色顆粒状細胞質を持ちます(矢印:有糸分裂像、矢頭:好酸球)。細胞質内顆粒は異染性を示します。(挿入図 左:トルイジン青、右:ギムザ染色)

診断医からの一言

無断での転用/転載は禁止します。

フェレットはエキゾチック哺乳動物の食肉目の代表とも言える存在です。以前のブームに陰りが見えたかと思いきや、最近でも人気のペットの一つです。個人的にはコツメカワウソの恩恵だろうと想像しています。特有の病気が比較的知られていて、IDEXXでもフェレットに有用な検査がありますので、機会がありましたらぜひご利用ください。

参考文献

1. Pathology of Small Mammal Pets. 2018. Wiley-Blackwell.
2. Ferrets, Rabbits, and Rodents Clinical Medicine and Surgery. 2021. Elsevier.
3. Vilalta L et al., J Comp Pathol. 2016; 155(4): 346-355.



診断医: 中嶋 朋美
DVM, PhD, DJCPV